

2018年度学校評価報告書(香里ヌヴェール学院中学校・高等学校)

学校目標	多様性と課題に満ちた世界の中で、“神の手足となり、人々の心を平和のうちにつなぐ人”として仲間のために生きる人を育てる。
	本校で学ぶ子どもたちが、多様性と課題に満ちたこれからの世界の中で、“神の手足となり、人々の心を平和のうちにつなぐ人”として仲間のために生きるには、真理を探究し続ける力と、幸せを実現するための最適解を仲間とともに創り出す力を育むことが必要である。知識・情報・知恵を活用し合い、互いの持つ力を引き出し合い、仲間とともに最適解を創り出す経験を、子どもたち自身が豊かに積み上げていけるよう、21世紀型教育を軸にした学びの場を提供していく。

21世紀型教育	
英語教育	世界の人々と、平和の実現にむけた対話を深めるツールとしての英語力を養成
探究型教育	世界の仲間と協働し、多様な価値観や能力を引き出し合い、真の幸せの創造へと昇華していく力を養成
ICT教育	世界中の人々に、平和の実現に有効な情報や主張を発信する表現力を養成

学校自己評価			
重点目標	取り組み計画・内容	評価指標	自己評価
21世紀型教育実践による教育充実(PBL・英語教育・ICT教育)	①課題解決・探究型授業の実践	学年進行に合わせたPBL型授業の導入・実践ができたか。	○ ・中学校1・2年生、高校I・II年生 新コース体制によるICT機器を用いたPBL型授業を実践。PBLのペースとなるスキルを定期的かつ系統立てて修得する時間を設け、各教科の授業の中でそのスキルを利用。 ・中学校3年生 従来型コース制(文理総合コース・英数特進コース)に、英語・社会・保健・総合的な学習の時間や学級活動を中心にPBL型授業を段階的に導入・実践できた。 ・高校III年生 従来型コース制(国際総合コース・スーパー英数コース)での知識集積型受験への対応を軸に、総合的な学習の時間や各教科授業の一部においてPBL型授業を実践、課題解決型思考スキルを身につけた。
	②英語教育の充実<中1SEC>英語イマージョン教育の実施(TTでの授業)	イマージョン授業の円滑な導入と実施ができたか。 中1:①1年間でネイティブ教員の英語を聞き取り行動できるようになったか。 ②新規導入の数学・理科は円滑な授業実践ができたか。 中2:①英語運用能力が向上したか。 ②英語によるプレゼンテーション能力が向上したか	SEC(スーパーイングリッシュコース) ・中学校1年生:音楽・美術・総合的な学習の時間(グローバルゼミ)・学級活動に加え、数学・理科にも導入。 ① ○ 1学期終了時点で、ネイティブ教員によるノーマルスピードの英語の指示を、正確に聞き取り行動できた。学級活動で、日本人教員の助け無しに指示を聞き取り行動できるようになった。 ② △ 数学と理科については、日本人教員が日本語で内容を繰り返す量を徐々に減らし年度末には要点のみの反復で授業が進められるようになった。しかし、教科内容の完全理解の上で進む授業形態ではないため、基礎学力定着のための取り組みや授業進捗の検討が継続して重要課題となっている。 ・中学校2年生:数学(段階的導入)、美術、音楽、総合的な学習の時間、すべての学級活動で実践。 ① ○ 宿泊研修その他の機会に、海外からの留学生等との交流を積極的にもち、次年度のオーストラリア修学旅行にむけた英語のアウトプットスキルを高めることができた。 ② ○ 年度末の研究発表会では、全員が、年間の探究活動の成果を論理的かつ効果的にまとめた英語プレゼンテーションを完成させた。
	<中3>習熟度別授業の継続	習熟度別授業を効果的に実施したか。(英検等の指標による英語力のアップが確認できたか。)	○ クラスをこえた習熟度別授業の継続実施により、中3での英検2級取得者、準2級取得者が増加。高校SEコースへの進学につながった。
	<全校>Skill & Structure、アウトプットを意識した授業展開	授業内での英語使用比率を教師、生徒ともに8割以上にできたか。	○ 日本人教員による英語授業は8割以上英語を使用しアウトプットの時間を積極的に導入した展開で実践。特にプレゼンテーションの機会を多く持つことで表現力の向上をめざした。
	<全校>6年間TOEFL(TOEFL primary, TOEFL junior, TOEFL 受験)を英語運用能力の指標として利用	年2回のTOEFL primaryまたはTOEFL juniorの受験で、2回目のスコアを上げることができたか。	△ TOEFL primaryまたは TOEFL juniorのスコアについては個人的な伸びはあるものの、全体としての著しい上昇は見られなかった。受験に対するモチベーションのアップが引き続きの課題である。
	③ICT教育の導入と実践	ICT機器を①探究型活動ツールとして有効利用できたか。 ②学びの深化のためのツールとして利用できたか。	① ○ 探究活動における情報共有・情報収集・プレゼンテーションや教科指導の中での意見交換、個別課題の配信や宿題の提出に積極的に利用できた。 ② △ Eポートフォリオの蓄積を通じて学びのふり返りの機会を多くもつことができた。模試の結果のふり返りやアダプティブラーニングのツールとしての十分な活用が次年度への課題と考える。(模試結果に基づく個々の課題に応じた教材の利用率の低さ)
教育のレベル向上	各種教員研修の実施	各種研修の実施の有無	○ ・PBL型授業力向上にむけた少人数グループ単位の授業研究会年2回実施 ・ICT活用授業研修を一人平均年2回 ・専門家による評価表(思考コード、思考レベル表)に基づく授業参観と事後指導を学期に1回～2回実施 ・宗教研修3回実施 ・人権研修1回実施 ・他校教員との授業検討会の開催(自主参加)
教育環境の整備	生徒増に対応する、安心・安全・快適な環境作り	各種設備の新設や増設、人員の増員と確実な配置ができたか。そのために必要な工事や教職員採用を行ったか。	△ ①B・C棟3階耐震改修工事の完了 ・普通教室の増設と机、椅子追加 ・学年単位の活動が可能な大教室の新設 ②アクティブラーニング・PBL型活動に適した空間の整備 ・可動式机、椅子を完備した教室の増設(C棟1階の改修) ⇒次年度に、本格改修予定 ・全普通教室への大型提示装置設置(増設)完了 ・タブレット一斉使用に堪えるwi-fi環境の整備(現環境の強化)⇒wi-fi環境整備は、順次実施中。 次年度生徒増に対応できるよう、増強工事継続中 ③生徒用トイレの増設 ④熱中症対策 ・卓球室空調機器設置、体育館空調機器更新と整備 ⑤防犯防災設備の充実 ・防火設備定期検査(法令による実施) ・生徒数増に伴う守衛体制の強化、防犯カメラの増設 ・廊下への緊急連絡用内線電話の設置⇒次年度全電話システムの更新に合わせて実施 ⑥設備の点検と改修 ・PCB含有安定器処理と照明器具更新(法令による実施) ⑦理科実験器具や薬品の管理体制強化 ・理科実験助手の配置 ⑧男子生徒更衣室の拡大(次年度男子生徒増への対応) ⑨その他 ・椅子体育館500脚追加 ・休憩スペース、各種自動販売機の増設 ・図書館個別学習機の設置 ・体育館の音響その他の設備の更新
募集・入試に係る事業	中学校の定員充足のための積極的広報活動	中学校の定員(75名)充足	△ ・香里ヌヴェール学院小学校からの内部進学者は11人(昨年21人)から減少 ・京都聖母学院小学校からの内部進学者は1人(昨年6人)に減少 ・他小学校からの入学者は31人(昨年は29人)に増加。 入学者数は昨年度より減少、75名の定員充足にはいたらず。
	高校の定員充足のための積極的広報活動	高校の定員(140名)充足	○ ・内部進学者36人、他中学校からの入学者110人の合計146人が入学。

学校関係者評価
<ul style="list-style-type: none"> ・自主的に学習できる力を育てることは大切。過保護ではなく、決め細やかな指導で個性と能力を伸ばしてきた聖母教育の良さも活かした、よりよい教育活動が展開されることを期待している。 ・生徒人数(特に男子生徒)の増加に合わせ、食堂の設置を考えてほしい。学校で提供する食事の種類が増えることを望む声は多い。 ・先生と子どもたちとの間の信頼関係に感謝している。子どもの成長とともに学校での様子が見えにくくなるので、保護者への連絡がさらに密になればよいと感じる。 ・先生に対する言葉遣い、先生から生徒への言葉遣いに違和感を感じる場面がある。社会的常識を身につけさせることも学校の大きな役割。 ・クラブ活動中の生徒たちが、来客に対して気持ちの良い挨拶してくれるのが好印象。 ・人数が多くなったことで、指定校推薦がどうなっていくのか不安という声をよく聞く。学校が様々な観点で改革に取り組んでいることはわかるが、大学進学への対応や次年度の体制に関する情報など、少しでも早く聞かせてほしい。 ・生徒人数の急激な増加で新しい先生も多くなった分、先生によって対応や情報の違いが生じている。